

ニホンの松のメッセージ

クレア業務部

岩手県南部の陸前高田市。三陸海岸南部に面した美しい街だ。この地の「高田松原」は日本百景の一つとして称えられる白砂青松の浜で、白い砂浜に樹齢 300 年を超える松が約 7 万本生息している。明治の歌人・石川啄木もこよなく愛したこの砂浜は、「一握の砂」の中で、若き巨匠の繊細な感情を今に伝えてくれている。「いのちなき砂のかなしさよ、さらさらと握れば指のあひだより落つ」この松原の一角に建つ歌碑に刻まれた、(旧制)盛岡中学生・啄木の作。

2009 年夏、アラスカ出身のモンゴメリー・ディクソンさんは JET プログラムに参加するために来日した。目指すは岩手県陸前高田市。頬が受ける三陸の潮風は心地よかったのだろうか。どこことなく故郷のアラスカ湾を思わせるリアス式海岸に親近感を感じたのであろうか。三陸の浜から太平洋を隔ててつながる故郷の大地にも思いを馳せたのだろうか。

美しい高田松原も、啄木の歌碑も、モンゴメリーさんの将来への熱い思いも、過去形になってしまった。あの日、すべてが変えてしまった……

モンゴメリーさんは陸前高田の街の、一つの、でも大きなピースだった。ALT として市内の複数の小中学校で子ども達の英語の指導にあたっていた気さくな彼は、子ども達から慕われ、先生方からも人気があった。いつも「モンティー先生」と呼ばれていた彼は話題の中心で、周囲には笑い声が絶えなかったという。

モンティー先生は、ある時はバスで、ある時は電車で、自転車で街中を駆け回った。眼前には慣れ親しんだ海岸や町並み。地元の人みんな顔なじみ。市内の小中学生向けの英語教室は彼が始めた。地元の若者主催の料理教室にも参加して、同世代との交流を深めた。アウトドア派で、地元の消防団と市民マラソンにも参加した。トライアスロンの大会では佐渡島にも行った。ALT としての活動だけでなく、日本での、陸前高田での生活も満喫していた。

そんな彼が、将来の夢として日本語教師を志したのは自然な流れだったのだろう。市の国際交流協会が毎週主催する外国人向けの日本語講座には欠かさず参加し、時には講師を買って出た。空いた時間には日本語の勉強。日本人でも難しい、微妙なニュアンスについて鋭い質問を浴びせて周囲を困らせることもあったとか。歴史に「もし」が許されるのなら、将来彼は、日米の架け橋となる人材をどれだけ育ててくれたのだろうか。

モンティー先生は、松がお気に入りだったのだろうか。同じ岩手県内の大船渡市内の海岸の1本の松を撮って、去年クリアに投稿してくれた。2011年のJETプログラムカレンダー（卓上版）の7月分に掲載されている写真だ。高田松原には、津波に抗って生き残る1本の松がある。今年も、ほどなく新規JETが来日する。2年前のモンティー先生のように希望に燃えた多くの若者に対して、天国のモンティー先生と2本（ニホン）の松は何を語りかけてくれるのだろうか。



「Abare-umi」

撮影：モンゴメリー・ディクソン（岩手県 ALT）

（撮影場所：岩手県大船渡市）